ORIENTEERING JAPAN

O-JAPAN

シンキングスポーツ・オリエンテーリング

'92／4

1992年〔平成4年〕4月10日発行
（毎月1回10日発行）
第9巻第4号 通巻第105号
昭和63年6月24日第三種郵便物認可

1992年スキーO世界選手権・男子スプリントレースのコース図

O-JAPAN もくじ

９２／４月号・№１０４

●第１８回
全日本オリエンテーリング大会 3
●インカレ９１
取材・桐田　幸宏
協力・天野　　仁
編集・岩出　雅人
「鹿島田浩二３年目にして
ようやくのＶ」 4
「最高の精神状態での勝利」小西陽子.....6
「連覇を狙います」　鹿島田浩二.....7
「闘魂は極まる一東大５年ぶりの優勝」...8
「七夕作戦大成功一筑波大３連覇」 9
「戦いを振り返って」リレー優勝校
女子・筑波大　男子・東大 11
●１９９２年度
スキーオリエンテーリング世界選手権....12
●＝イベントリポート＝
第２回日本学連ｽｷｰｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ大会 13
第１８回岡崎東公園ＯＬ大会 13
（全国勤労者ふるさと交流会）
ふれあい淡路ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ 大会 13
第１４回早大ＯＣ大会 15
●Ｏ－ＦＯＲＵＭ
第８回京大ＯＬＣ大会の
後援に関するお詫び　京大ＯＬＣ.....16
ミスパンチに関して　児玉　拓.....16
紙上「公開討論」「言いたい放題」.....17
●＝編集者への手紙＝
「ＶＷＣ９２決勝コースセッター」
Christine Marshall, Mike Morffew....18
●「情報あれこれ」「編集部より」.....20

［今月の表紙］３月14日，インカレ個人戦での京都大学・中村弘太郎選手

［今月の地図］１月31日，フランスのポンタルリエ近郊で行われたスキーＯ世界選手権・男子スプリントレースのコース図

平成３年度（第１８回）全日本オリエンテーリング大会

□ □ □ □ □

平成３年度（第１８回）全日本オリエンテーリング大会は，去る３月２２日，岐阜県美濃加茂市蜂屋町周辺で開催された。参加者数は全国から約１７００人を数え，例年のごとく春の野山を力いっぱい駆けめぐった。

男女のＥクラスの成績は以下のとおり。

□Ｈ21Ｅ
①村越　真　②稲葉英雄　③平井　均

□Ｄ21Ｅ
①宮川祐子　②木植早生　③福士淑子

□Ｈ19-20 Ｅ
①鹿島田浩二　②福留　潔　③森　一伸

□Ｄ19-20 Ｅ
①小西陽子　②上村紀子　③田島利佳

□ □ □ □ □

会場からテラインを望む

いつもながらのスタート風景

インカレ91

取材　桐田幸宏
協力　天野　仁
編集　岩出雅人

平成４年３月13日～15日にかけて、第14回日本学生オリエンテーリング選手権大会が、栃木県日光市・今市市において開催されました。天候にもめぐまれる中、個人戦男子は鹿島田浩二、女子は小西陽子が制し、団体戦は両チャンピオンを擁する東京大と筑波大が、それぞれ優勝旗を手にすることとなりました。

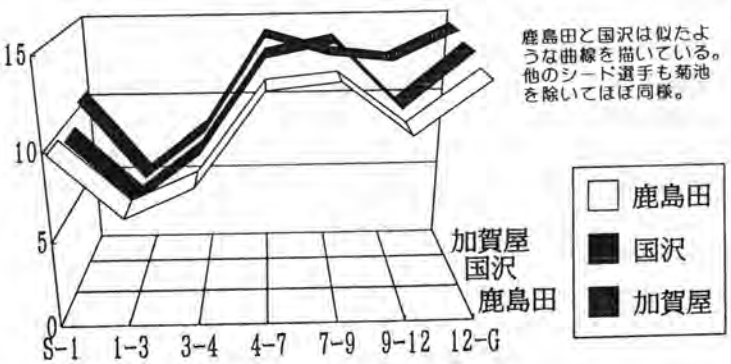
鹿島田浩二３年目にしてようやくのＶ

個人戦男子は、実力が伯仲する高レベルな争いとなりました。「勝負を決めたレッグというのはない（大会競技責任者・伊東真一）」と言われるように、有力選手誰もが大きなミスの少ない走りを見せ、むしろ全体を通した集中力の持続やペース等が勝敗を決したように思われます。

優勝をした鹿島田浩二は、今更説明するまでもなく明らかに実力No.1。昨年は、世界選手権の日本代表メンバーにもなり、大活躍を果たしてきました（O-Japan 91年10月号参照）。インカレにおいても１年生の時から常に優勝候補の筆頭。しかしながら、実力ある多くのライバルの出現で、過去２年間は金メダルに一歩及びませんでした。学生ＯＬ界は極めて高いレベルにあったと言えます。それだけに「国沢は京葉で速かったし（同一コースの鹿島田と１分11秒差にせまった）、一発気を抜くと危ないとは思っていました。（鹿島田）」と本人も言う通り、鹿島田といえども大きなミスや、ちょっと気を抜くことが命取りとなっていたことは、図１に表した上位３名のグラフからも明らかでしょう。

グラフに例えて言えば、有力シード選手のほとんどが似たような曲線をたどる結果となりました。すべてのシード選手が、その実力を発揮したことについては高い評価と感動を与えています。「実力者が実力を発揮した大会になったのでよかった。（テクニカルアドバイザー・佐藤信彦）」「そろそろシード選手の誰それが現れる頃だと思って待っていると本当に現れる。あれには感動したよ。」といった声が観戦者の間からも聞かれたものです。「トレーニングは、インカレの為にというよりは、インカレ・全日本・ＡＰＯＣの為にやっていました。10月14日から３日と休む日なくトレーニングしていました。月300kmくらいで、自分でもまじめにトレーニングしたと思います。（鹿島田）」「全体的に遅い。トレーニング不足だった。理由は言ったら言い訳になるから言わない。（中村弘太郎）」この辺の準備状況が、結局勝敗を決したのかも知れません。

［図１］個人戦男子上位３名の主要区間における所要時間



鹿島田と国沢は似たような曲線を描いている。他のシード選手も菊池を除いてほぼ同様。

２位には、鹿島田とは高校時代からのライバル国沢五月（一橋４）が４年目にしてようやく実力を発揮しての初入賞。本人のコメントは「２位でもいいやと思ってがたく走った。でもやっぱり２位だよな。」３位は、ノーシードながら加賀屋博文（筑波４）が大健闘。４位は、昨年度２位、鹿島田と同じく世界選手権日本代表の中村弘太郎（京都４）、５位は、２年ぶりの入賞で菊池正昭（東北４）。菊池は、他の入賞選手に比べると不安定なレースを見せましたが、「つぼりながらもあきらめずに走ったのが入賞の要因でしょう（伊東真一）」。６位は、昨年度のチャンピオン井上直丈（名古屋４）が、ケガと病気から復活しての堂々の入賞となりました。

小西陽子シードを押さえ大金星！

個人戦女子は、大本命の福士淑子（千葉４）や対抗馬の石田小百合（筑波４）がくずれる中、ノーシードながら安定した走りを見せた小西陽子（筑波３）が優勝を手にしました。

小西の勝因については、「自分のレースができて結果がついてきた。インカレが近づくにつれて、プレッシャーよりもエリートを走れるのがうれしい気持ちが上まわってきた。（小西）」と本人も言っている通り、精神面での充実度が勝機に結びついた様です。実は小西は、１月に指名されたシード選手の座を自ら辞退しています。「自分にはシードの実力ないと思ったし、人前に出るのが嫌でした。（小西）」「彼女の方から相談を受けて、プラス面とマイナス面を説明した。どっちを選ぶか自分で考えさせた。小西はち

よっと考えて、自分で上田（日本学連評議員長）に電話した。（筑波・橋コーチ）」とのことで、「レースに集中できないすべての要因を排して臨んだのでしょう（伊東真一）」。これが小西の大きな勝因となった様です。

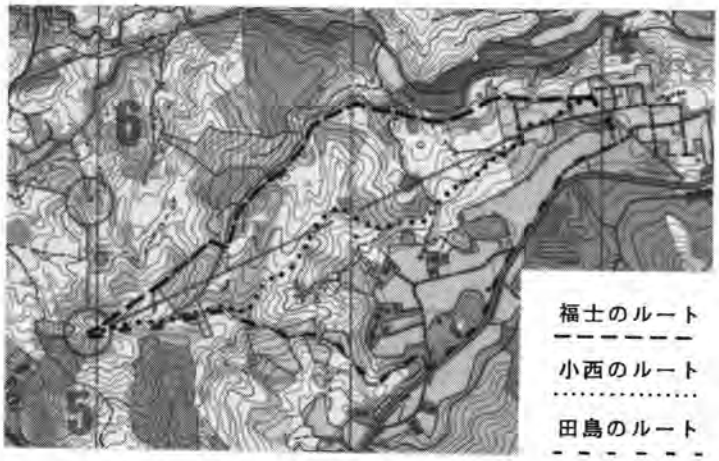
一方、本命だった福士は「勝ちたいと思って臨んだレースでした。いつもは、『いいやいいや、自分が楽しんでればいいや』と思っていましたけど、それをメダルを取りたいという気持ちに持っていきました。プレッシャーではなかったけど、その勝ちたいというのがあせりになったかも知れません。」と言っています。

しかし、メンタルな要素だけで本当に勝負は決したのでしょうか。「女子については本格的なテクニカルなコース（伊東）」と言われるように、真に技術面を試されるレースでもあった様です。「勝負を分けたのは、完全に④→⑤（伊東）」と言われています。小西のルート［図2］がベストルートです。「結果的に④→⑤でベストルートを選んだ人が入賞しているんでしょう（伊東）」。田島利佳（武蔵野女短2）は、一緒にいた苗村（相模女子3）を振り切りたくて、あえて南の道走りを選んだそうですが、⑤番ポストで再び苗村と同時チェック。苗村はベストルートを通っていますので、道走りルートもそれ程悪くはないのかも知れません。

問題の福士は、「事前にちゃんとしたプランニングがありませんでした。④の付近が造成しかけた土地で、入ってはいけないのかと思い込んで林を走っていったら水径に出ちゃって、そのルートになってしまいました（福士）」。これが勝負の分かれ目。水径のルートで体力を使い果たし、あとのレッグに集中力を欠いて、続けざまに精彩を欠くOL。④→⑤自体も、そのあとのロスタイムも、共に優勝を落とすに充分な、無念のロスタイムとなりました。［図3］

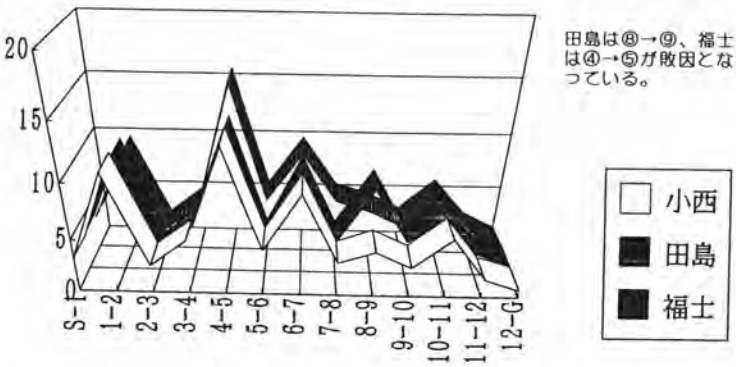
福士は結局3位。2位の田島は、終始小西を上まわるハイペースな展開でしたが、⑨で痛恨のミス。これ1つで金メダルを逃しました。4位は、田島と一緒にレースを展開できたのが一面ラッキーだった苗村が入り、5位には、シード選手並の安定したタイムを各レッグで出した奥山陽子（相模女子3）が入りました。相模女子大は大活躍です。6位には昨年度の3位、岡田光代（横浜国立3）がかろうじて入賞を果たしました。

［図2］個人戦女子上位3人の④→⑤ルート



この区間で、小西は13′18″、田島は12′47″なのに対し福士は15′29″かかった。しかし、この段階（⑤通過）では、それでも小西より福士のほうがまだ1′01″リードしていた。田島はさらに1′21″速い。

［図3］個人戦女子上位3名の全区間における所要時間



田島は⑧→⑨、福士は④→⑤が敗因となっている。

個人戦男女上位成績

男子

1	鹿島田浩二（東京3）	73′14″
2	国沢　五月（一橋4）	75′37″
3	加賀屋博文（筑波4）	78′13″
4	中村弘太郎（京都4）	78′17″
5	菊池　正昭（東北4）	81′39″
6	井上　直丈（名古屋4）	81′56″
7	池上　理俊（神戸4）	83′58″
8	小山　博史（東北3）	84′00″
9	森　一申（東京農業3）	84′08″
10	利光　良平（駒沢4）	84′25″

女子

1	小西　陽子（筑波3）	67′21″
2	田島　利佳（武蔵野女短2）	67′45″
3	福士　淑子（千葉4）	69′03″
4	苗村　恵子（相模女子3）	70′46″
5	奥山　陽子（相模女子3）	71′39″
6	岡田　光代（横浜国立3）	73′32″
7	清田　由紀（千葉4）	74′00″
8	志村　聡子（早稲田1）	74′48″
9	平山寿美子（静岡4）	75′47″
10	石田小百合（筑波4）	76′32″

最高の精神状態での勝利

個人戦女子優勝　小西陽子

今だに、自分がインカレで優勝できたという事が、半分信じられない気持ちです。はじめての個人戦エリート出場にして、優勝できるとは、周囲の人はもちろんの事、自分自身も99％ありえない事だと思っていました。（残る１％は、宮川祐子さんが12月頃「小西が秒差で優勝する夢を見た。」と言ってらしたので、「大胆な夢だなあ。」と思いつつも、とても勇気づけられたという感謝を込めて…。）

その上、この一年間目指してきたのは、“インカレ個人戦優勝”ではなく“インカレ団体戦優勝”と“年に一度の大舞台で悔いのないレースをすること”の２つでした。一年間、インカレの事を考える時、個人戦はいつも団体戦の次にありました。決して個人戦を軽視していた訳ではありませんが、ただ自分のためだけに走れる個人戦は、みんなの期待を背負って走る団体戦よりも、気が楽だったのは確かです。「自分のためだけに走っていいんだから、最高の舞台を良く味わって楽しく走ろう。」という気持ちで、個人戦に望もうと思いました。野望を抱いていたとすれば「入賞したいな。」と思っていた事くらいでしょうか。でもそれも、“自分のレースをちゃんとして、その結果ついてくるもの”だと思っていたのです。思えばおめでたい奴でした。全くプレッシャーなどなかったのですから…。一週間前から、期待とうれしさでインカレが待ち遠しくて待ち遠しくてたまらず、何も手につかない有様でした。

さて、このような精神状態で迎えたインカレ個人戦。前日の夜もぐっすり眠ることができ、スタート地区に向かうバスの中でも、運ちゃんと「オリエンテーリングって走る競技なんですよー。」などと話してくつろいでいました。バスストップ付近に、オフィシャルの橋先生と村田さんが大きなシートを広げて陣取っているのを見つけて、うれしくなりました。天気も良く、幸せな気持ちでした。

スタート前、自分では落ちついていると思っていたのですが、やはり、初めてのインカレエリート出場ということで緊張していたようです。スタート直後、地図を折って走り出した時、あまりに息ができなかったので、始めて自分が緊張している事に気付きました。「ヤバイ」と思いましたが、「仕方ない。緊張がおさまるまで慎重に行って飛ばないように気を付けなくては。」と何とか思い直し、気を落ち着かせました。１ポ、２ポと、確実にチェックしましたが、走りはじめるとすぐに息が上がってしまい、走り続ける事ができないのです。「息ができない。苦しい、歩きたい。次の道に出たら歩こう。」そんな事ばかり考えていたので、中間計時付近まで、レースに集中する事ができずに、ぜーぜー言いながら必死で走ってました。「早くゴールして楽になりたい。」と思い続けていました。リズムに乗れずに途中で何度もうろうろしました。スピードも出せません。

が、中間計時のポストを取ってから、しばらくたった頃、ひたすら次のポストを目指して走る自分がいました。緊張も、息の苦しさも、ゴールもすべて忘れてレースに集中していたのです。それからはいかに速く、確実に次のポストに行くか、という事だけしか考えず、走り続けました。

「良かった、もう大丈夫。」と思えたのは、ラス前からの斜面をかけ降りる時です。リズムにも、スピードにも乗っていました。ちっとも苦しくありません。ラスポを取ってゴールする時には、最高の舞台で、なんとか自分の力を出しきれたんじゃないかという満足感でいっぱいでした。思わず笑顔になりました。

自分のタイム67’21”を知ってウイニング（予想）が65’だから入賞できるんじゃないかと思って喜んでいたところ、福士さんのタイムが私のタイムを上回るかもしれないというアナウンスがありました。「えー！そんなー。」と思う間もなくあれよあれよという間に優勝が決まっていました。

その瞬間、一言で説明できない程複雑な気持ちになりました。一度も勝てなかった先輩方に勝ったのです。うれしさよりも、「こんなことってあるんだなあ。」と他人事の様に不思議な気持ちになってしまいました。勝利の女神は気まぐれです。

今思い返すと、インカレ前の調整がうまく行き、精神面に何の負担もなく、集中して走れた事と、自分のレースができた事が勝因かな、という気がします。

“自分のレースをする。”そんな当たり前の事が、インカレではとても難しいのです。自分の最高のレースができたこと、そのレースに対する結果が“優勝”だった事を、素直に喜びたいと思います。

これから一年間、今度は“インカレ団体戦優勝（４連覇）”と“年に一度の大舞台で悔いのないレースをすること”の２つの他に、“インカレ個人戦優勝”と、もう一つ目標を増やします。インカレでの成功は、決して自分だけの力ではなく、同じ目標を持ち、励まし合って練習してきた仲間達の存在、親身になって面倒を見て下さったコーチ達の存在があったからだという事を決して忘れずにがんばって行きたいです。

そして、何より最高の舞台を用意して下さった実行委員の皆様にお礼を申し上げねばなりません。本当にありがとうございました。

プロフィール
①S46年２月12日生まれ・21歳・O型
②OL歴３年・新敬ベアOL大会
③91全日本D19－20E１位
④まずは４連覇
⑤読書
⑥一般文学

連覇を狙います

個人戦男子優勝
鹿島田　浩二

プロフィール
①生年月日・年齢・血液型
②ＯＬ歴・初めて参加した大会
③おもな戦績
④これからの目標
⑤ＯＬ以外の趣味
⑥大学での専攻

「インカレなんて数ある大会の一つ、勝てばそれはそれで凄いし嬉しいことだけど、負けたって別に落ち込むことはない。」そんなことをインカレ前に考えてました。まあ「普通の大会」とまでは言わないけれども、全日本、ＡＰＯＣと続く今年に限っては例年と比べて気持ちが楽でした。インカレで負けても全日本、ＡＰＯＣと自分の活躍する場はあるし、トレーニングだってインカレのためだけにやって来たのではない、むしろインカレはその後に続くステップなのかもしれない、そういう気持ちがインカレに向けてかなりリラックスしたムードを作っていました。生来あまりピーキングと言うことを知らず、練習会であれ大会であれ同じように走ってしまう自分ですから、インカレへの意識を軽くすることは特にマイナスになるとは思いません。変なプレッシャーを感じるよりよっぽどいいレースができると思ってました。

そんな意識があったからか、当日はとても落ちついていました。前日から風邪気味であったのが多少気になりましたが、それでもそれほど不安にはなりませんでした。しかしスタートしてみると前半は小さなロスが多く、③ではイージーミスで１分半のロスをしてしまいこの時点ではかなり焦りました。しかし中盤から後半にかけてキレは無いもののミスのないＯＬで無難にこなし、全体としてはまとめたレースとなりました。③でミスをした後はかなり動揺しましたが、「インカレには村越さんは走っていない。だから早く走らなくても着実に廻れば絶対勝てる。」と自分に言い聞かせ、自信を持ってＯＬをしました。普段常に村越さんの走りを意識して走っている僕にとって、ある意味では気楽なレースだったかも知れません。

勝ってしまえば何でも言えるので勝因などと偉そうに言うのは好きではないのですが、夏に欧州に長期滞在し世界選手権を走ったこと、そして帰国して村越さんというインカレを越えたレベルの人を意識して来たことが大きく影響しているように思います。それとトレーニングを伴にする大学の後輩を数人得たこともとても幸運なことでした。一人で走るより誰かと一緒のほうがずっと楽しいし、自分以外でＯＬに意欲を燃やしている人を見るととても刺激を受けます。彼らのうちの一人である鈴木君は今年２年生ながら団体戦を走り金メダルを手にしました。僕としてもとても嬉しいことです。彼を始めとする僕の後輩はきっと来年は良きライバルとなってくれるでしょう。

さて、僕には来年にもインカレが有ります。具体的なトレーニング計画を立てた訳ではないので大きなことは言えませんが、二連覇を狙います。そして団体戦も勝って、個人・団体両二連覇となればと思っています。（そうすれば金メダルの数で村越さんと並びますからね。）

プロフィール
①Ｓ45年９月３日生まれ・21歳・Ｏ型
②ＯＬ歴９年・Ｓ58朝日Ｈ12Ｂ
③90ｺﾝﾊﾞｰｼｱｰﾄﾞ(ﾗﾄﾋﾞｱ)個人71位・団体15位
91世界選手権（チェコ）　個人50位・団体18位
90・91全日本Ｈ19－20Ｅ優勝
④ＯＬはもちろんこれからは勉強もちゃんとやりたいですね
⑤公園の散歩
⑥工学部都市工学科環境衛生コース

団体戦男女上位成績

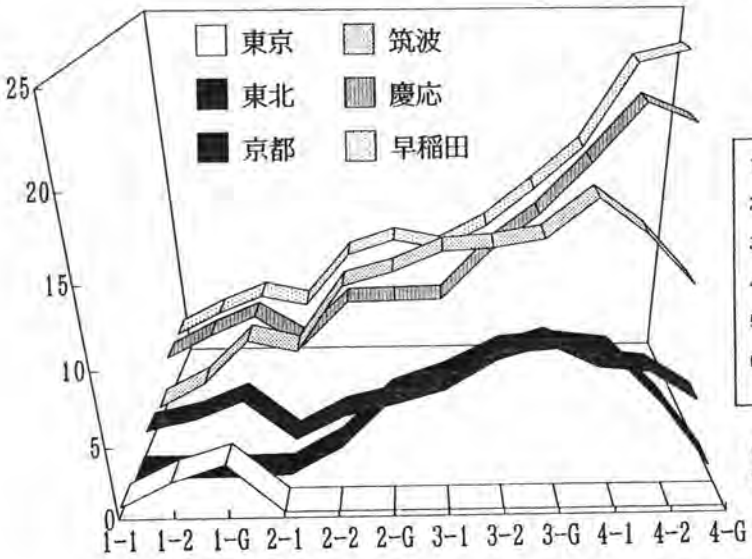
男子		女子	
１東京大学	２３０′０６″	１筑波大学	１３６′１２″
２東北大学	２３０′３４″	２千葉大学	１４０′０８″
３京都大学	２３３′０６″	３日本女子大学	１４１′３４″
４筑波大学	２３９′３５″	４静岡大学	１４５′３９″
５慶応義塾大学	２４９′１１″	５広島大学	１５０′２２″
６早稲田大学	２５２′５８″	６早稲田大学	１５２′５０″
７一橋大学	２５７′５７″	７相模女子大学	１５３′０２″
８法政大学	２７１′０１″	８京都橘女子大学	１５３′４１″
９東京農業大学	２７１′１７″	９京都女子大学	１５６′１９″
10静岡大学	２７２′１０″	10お茶の水女子大学	１５９′５６″

闘魂は極まる

－東大５年ぶりの優勝－

団体戦男子は、東京大学・東北大学・京都大学・筑波大学が下馬評通りの優勝争いを演じ、２走鹿島田で一歩抜け出した東大が、最後わずか２８秒まで差をつめた東北大必死の追い上げをかわし、５年ぶり、４回目の優勝を遂げました。

昨年度は個人戦のベスト３、井上直丈（名古屋）・中村弘太郎（京都）・鹿島田浩二（東京）がすべて３走に起用され、オーダー表を盛り上げる場面がありましたが、今回はすべてが２走。やはり大会を盛り上げる画期的なオーダーとなりました。



１東　京（岩本隆史４－鹿島田浩二３－鈴木卓弥２－竹澤聡３）
２東　北（小山博士３－高橋政善２－入江崇１－菊池正昭４）
３京　都（川前紀尚３－中村弘太郎４－村井信哉４－小長井信宏３）
４筑　波（中嶋陽一３－砂川貴幸３－加賀屋博文４－上野嘉幸４）
５慶　応（志賀俊信４－小河原成哲４－稲津隆敏３－中村一樹２）
６早稲田（佐藤昭博４－武田光２－松葉敏則４－原一弘３）

東大２走・３走の快走がよく現れている。東北４走の追い上げも良く目立つ。

［図４］団体戦男子上位校のトップとのタイム差推移

「２走を走ったのは、早めにしかけるつもりだったから。何にしても、先にちぎって、前に出た方が楽。２走でトップに出るつもりっだった。もしカッシー（鹿島田）が２走に来たら３・４走勝負。予定では東大と京大の一騎打ちだった。（中村）」「過去３年間、トップ争いができなくて毎年悲壮感のうちに終わっている。今年は楽しみたい。２走で自分が走ったら絶対トップ争いできる。今年は盛り上がろうと思いました。（鹿島田）」

レースは、まず１走で東北大が一歩抜け出してトップゴール。続いて、３分半遅れで東大・京大が続けざまにゴールします。学生界のエース、鹿島田浩二と中村弘太郎は同時にスタートを切りました。会場が大きく湧きます。「東北が絶対有利だよ。もし鹿島田と弘太郎に追いつかれても、ついてきゃいいんだもん。東北は菊池が控えてるだろ。東大と京大はこれで使い果たしてるんだからさ。もったいねーよな。」そんな声も会場では聞こえました。

東北大・東大・京大の１走・２走は実は全く同じコース。鹿島田と中村は序盤で東北大に追いつきます。その後、前半はお互いに相手を確認できる位置で鹿島田が一応先行。後半に入って長い道走りから山に入ったところで、ルートが異なり２人は離れてしまったようです。中村はその後、精彩を欠き、時々東北大に追いつかれながらも終盤でようやく東北を離し、鹿島田に遅れること３分でゴールしました。本人は、「鹿島田のペースで地図が読めなかった」と言います。

「３走は差をキープする予定だったが、卓弥（鈴木卓弥・東京３走）が、いい走りをした。小長井（京都４走）が出る時、逆転は厳しめだった。京大の敗因は、エースの自分が役目を果たさなかったこと。２走で自分がやらなければならなかったことは２つあった。鹿島田と一緒に帰ってくることと、東北を５分振り切ることだった。そのどっちもできなかった。（中村）」

「２走終了時、京大とは僅差でいい。弘太郎よりはそんなに遅れなければミスじゃない。弘太郎以外なら、絶対先に帰ってこないといけないというプレッシャーがあった。東北には５分ちぎってないといけなかった。東北の２走は基本的に１人でやっている。つるもうという意思がなかった。東北は結果的にこれが良かった。（鹿島田）」

２走終了時、東大のリードは対京大３分、東北大５分半。この貯金を最大限に活かして東大は優勝を飾ります。会場には東大応援歌『闘魂は』がこだましました。

２位は、アンカー菊池の力走が見られましたが、東大にわずかに届かず、東北大。３位に昨年度の優勝校京大が入り、４位は、優勝争いからは一歩おかれた、筑波大が入りました。５位・６位の入賞争いは、熾烈な早慶戦。アンカー第一中間で同時チェックにまでもつれた末、最後は慶応が逃げ切りました。５位慶応は、インカレ・対抗戦すべてを通して早稲田への初勝利。６位早稲田は、インカレ有史以来の連続入賞記録をかろうじて守り切りました。

七夕作戦大成功

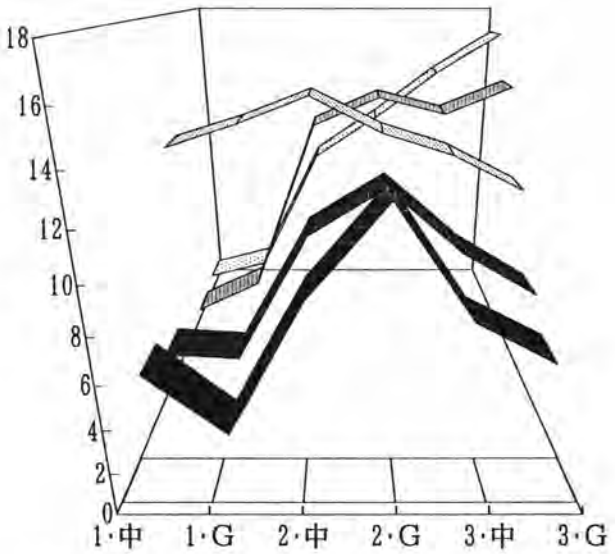
－筑波大３連覇－

団体戦女子は、福士と濱田を擁する千葉大絶対有利、というのが戦前の予想でした。しかし、個人戦で福士を破ったチャンピオン小西と、エース石田を擁する筑波大は、小西－石田－折笠のオーダーを提出。対する千葉大は草野－濱田－福士のオーダー。傍目には、なんとなく筑波有利の気配。「戦略がうまい」という声が飛び交うこととなりました。

１筑　波
（小西陽子３－石田小百合４－折笠敦美３）
２千　葉
（草野望４－濱田由紀４－福士淑子４）
３日本女子
（大山良子４－渡辺由美子４－渡辺初実３）
４静　岡
（清水百代３－平山寿美子４－佐藤尚子４）
５広　島
（川上留美子４－植田佳子１－石黒佳子３）
６早稲田
（馬場亮子２－志村聡子１－金並由香２）

□ 筑波　▒ 静岡
■ 千葉　▥ 広島
■ 日本女子　▒ 早稲田

筑波は２走が快走。静岡大以外は大きく差が開いた。



［図５］団体戦女子上位校のトップとのタイム差推移

「千葉の方が圧倒的に強かったので、早めに波に乗ってしまって、逃げ切る作戦でした。（小西）」「千葉大が全く予想通りの走順できた。福士を２走にもってきたら負けていたと思う。（石田）」と筑波の選手たちは述懐しています。一方千葉は、「筑波はあの走順でくると思った。先行されてもそんなに遅れない自信があった。もし福士を２走にしたら、挑発に乗ったような形になると思った。（濱田）」「私が２走を走ればよかったのかなと思ったこともあったけど、だからと言って濱田を３走にしても、またどうなっていたか分からないんだし、あれしかなかったと思います。（福士）」と語ってくれました。

選手起用の権限を条件に筑波大のコーチを受諾した橘直隆氏は、「千葉大が走順を動かさないことは99％分かっていた。理由は、濱田を２走から動かせない。福士１走もないから自然に決まる。筑波は一番強いのを２走にぶつける。小西は、１年前からすべてのリレーで１走をやらせていた。問題は３走が逃げ切れるかどうか。１・２走で勝ち切らないと勝ち目がない。２走が帰ってきた時点での差が、５分で負け、10分で勝ち、その間は勝負と思っていた。」と話します。筑波の走順は、前夜の戦略ではなく、当初から固められていた作戦であったようです。

レースが始まると、千葉大の１走・２走は予想以上の苦戦。２走終了時、筑波のリードは11分。福士に逆転を望むことは、もはや奇跡を待つに等しいものがありました。

結局、レース展開は筑波の戦法通りとなります。１走・２走がくずれるのを待って、たなぼた優勝をさらうしかない。これを、たなぼた作戦、改称して「たなぼた作戦」と呼びます。１年間イギリスへ留学する石田小百合にかけての、橘コーチによるオシャレな命名でした。これを受けて筑波大は、近所の山から笹を調達。会員１人１人の思いを込めた短冊をつけて、選手と共に七夕かざりが会場にお目見えします。

筑波大学３走、折笠敦美がトップでラスポを通過。大会実行委員長の篠崎東雄からレイがかけられます。そして、筑波大ＯＬ愛好会の想いを込めた七夕かざりを石田が、校旗を小西が持ってのウイニングラン。筑波大学は３年連続、14回に及ぶインカレ史上、実に８回目の優勝を遂げました。

筑波大のリード11分を３分差にまで追い上げ、千葉大が２位でゴール。３位以降は、１走の大パックを受けて、２走・３走に実力のあるチームの混戦状態となりました。３位は、ここ数年間上位につけている、日本女子大。４位には、３年連続４位の静岡大。５位には大健闘で広島大が入りました。６位は、早稲田大・相模女子大・京都橘女子大・京都女子大の熾烈な入賞争い。最後に抜け出した早稲田大が、若いメンバーでの入賞を果たしました。

3走・折笠敦美

インカレ90は筑波の優勝で幕を閉じた。エース二人が引退し、来年の筑波はどうなるか人々の注目するところだった。

「来年も優勝したい」誰もがそう思っていた。そして、インカレ91への挑戦が始まった。

人々の期待は我々3年生がこれからどうなるかだった。日頃から仲が良く、レースの時はライバルと意識しながら、ワイワイ、ギャアギャアいっている伸び盛りの私達に自然と人々の期待が注がれた。

今年目覚ましい力を発揮した小西陽子はインカレ90が終わったとき、こう書いている。「筑波女子の代表になる。それに見合う努力をする。」書くだけなら誰にでもできる。彼女は着々と実行していった。

秋頃、OLシーズンの到来とともにインカレがますます重要な位置を占めてきた。毎週毎週どこかに出掛けて行ってはOLをするのが当たり前になっていた。プレセレ、セレクションが終わり、12月本格的に選手決定の段階に入った。女子だけのミーティングでは決められないと思い、その決定権を今回コーチを引き受けてくださった橋先生に委ねた。1走小西、2走石田は仮決定していた。あと一人、3走。この時の目標は2位。千葉大との差は10分だった。

橋先生に指定されたセレクションレースが3本あった。関東インカレ団体戦・筑波戦・OC大会。事実上、個人戦でエリート権を獲得した折笠、渡辺（弥生）のどちらかだった。OC大会までは私に有利なレースだった。だが、一番重要視するはずのOC大会で20分の差をつけられて渡辺が優勝した。渡辺が上り調子、折笠が下り調子、橋先生を最後の最後までてこずらせた。結局、橋先生がコーチとしての勘だけで決めると言い、すべてを任せるしかないと思った。

この間、どれほどたくさんの方々のお世話になったか知れない。ポジティブシンキング"自分しかいないと思え"これほど難しいことはなかった。女子合宿（1／4・5）では競技生活の厳しさを感じ、怯みそうな状態からやってやるかと奮起した。いつかのミーティングでは話しながら感情的になり、小西が泣いた。小百合さんも泣いた。

インカレ合宿が終わって、もうやめてもいいかなと思った。自分から抜けたほうが傷つかずに済むから。それも出来ずに少しずつ諦めていった。というよりは、駄目だったときの心の準備をしていった。そうしなければ、いられなかった。本当なら最後まで走るつもりで心の準備をしなければならないものをそこから逃げていった。

いつも仲のいい二人が言葉少なになる。個人戦はセレクションと思う前に、いいレースをしたかった。一年に一回しか走れないのだから。「お互いいいレースをしよう」と一言でも言えたならと思う。レース後、3走折笠と決定。

心配ないからね、自分のできることをやってくればいいんだよ。ゴールで待ってるからね。・小百合

自分のレースをしてきてね。・小西

私の分まで走って！…くれなかったらおこっちゃうよ。・弥生

前夜、ミーティング、ケーキとぼたもちが振る舞われた。小西の優勝にあやかってケーキを御馳走になった。「二走までで勝負を決める。」これが最後の言葉だった。

団体戦当日、個人戦の疲れで良く眠ったらしい。「あっちゃん寝てるなあ。」と思ったという小西は眠れなかったようだ。小百合さんはとても私に気を使ってくれている。「心配しなくてだいじょぶですよ。」という力はなかった。走らなければならないその重圧が私を締めつけていた。

9時40分、1走スタート。小西らしい落ち着いたスタートだった。"緊張して息が苦しくなる"というようには見えない。先頭グループで中間、ラス前を通過、小百合さんがゴールで待機。どんな状況でも自分のレースをするというのが私に与えられた課題であった。今、トップで小西が来る。恐らく自分もトップでもらうだろう。予想外ではあったが十分予想できたレース展開である。小西ならやってくれる。

10時22分、2走スタート。折るような気持ちでウォーミングアップを続けた。小西がレース内容を話しながら、絶対大丈夫だからと励ましてくれる。2位以下との差はかなり開いた。つぼったら終わりだという思いは変わらない。あゆみさん（＝熊林あゆみ・OG）が応援している。由美さん（＝白井由美・OG）もいる。ラス前を通過。"勝利のアクエリアス"を飲む（これには不思議なカがあるんだというジンクスつきのもの）。橋先生から「前向き、歩測」と最後の一言。

11時5分、3走スタート。小百合さんが笑ってゴールする。「落ち着いて」の言葉をかけてくれた。「緊張するな」

「笑え」と周りから声が飛ぶ。決して冷静ではなかった。動揺していたといった方が正しい。1ポまで遠い。ルートが決められない。焦る気持ちが走らせる。チェックポイントが取れない。決めなきゃだめと言い聞かせる。迷ったまま尾根越えを始め、焦る。このままでは駄目だ。うろたえるうちに道に出て、リロケート。もしかしたら、抜かれたかもしれない。そう思ったまま、あとは自分のレースだった。2ポでどこかの2走に会う。4ポで図情の2走に会う。1ポの後ラス前まで、いいレースだった。これなら大丈夫かなと思う。テープ誘導区間、「長いなあ」人が見えてきた。小百合さんだ、小西だ。頑張れ、あとちょっと、頑張れ。みんなが応援してくれる。実行委員長の東雄さんが駆けてくる。

"筑波大学3年連続8度目の優勝"

みんなが輪になって迎えてくれた。弥生ちゃんが迎えてくれた。

私は1ポまでのあのミスは忘れない。

あれからもう一週間。私達の心はもう4連覇に向かっている。

プロフィール

2走・石田小百合
①S43年10月7日生まれ・23歳・A型
②OL歴4年・S63年静大大会
③90全日本大会D21E2位
④一生OLを続けていく
⑤旅行・体を動かすこと
⑥日本語教育

3走・折笠敦美
①S45年9月10日生まれ・21歳・B型
②OL歴3年・新教ペアOL大会
③91東日本大会D19－20E2位
④インカレ団体戦4連覇
⑤部屋の模様替え・パズル
⑥日本文化

戦いを振り返って

優勝校　女子筑波大・男子東大

１走・岩本隆史

今年の東大は、ここ数年団体戦で好成績を挙げている早大を見習い、一年間通して指導をするコーチというものをつくろうということで、ＯＢの木嶋隆司さん（奈良インカレ８位、埼玉インカレ７位）にお願いしました。木嶋さんは社会人とは思えない程の頻度で大会や合宿に来ては様々な方面にわたる指導をして下さいました。このあたりは過去の東大と大きく違うところではないかと思います。

さて、コーチの作戦では、エース鹿島田を２走におき、早い時点でトップに立ってそのまま逃げ切ってしまおう、ということになっていました。そのため１走は、先頭集団から遅れても、トップから５分以内にもどって来るというのが事前に与えられた使命でした。

スタート直後、猛然とダッシュしていくランナーは無視して、まずは地図を広げてコースの全体像を把握することにしました。するとほぼ完全に事前の予想通り、ここでまずは一安心でした。

２番に向かう道で東北大、京大と一緒になり、前半は前を行く東北大を意識しながらこなしていきました。

再びスタートフラッグの脇を通る道走りから東北大は見えなくなり、このあたりは４番から前に出て来たゼッケン「３６１」のランナーの後を追う形でした。ビジュアルを過ぎて最初のポスト付近で地形のイメージがあわず少し戸惑い、後ろから来た２～３人とも一緒になって８番まで進みました。８番付近には４～５人がいたのですが、脱出方向が割と様々だったようで、京大以外のランナーを見たのはこの時が最後です。その京大も左の沢に落ちていき、９番で再び会うまでは一人でした。

９番の脱出後、道に出たところで事前の使命を思い出し、「先頭集団からは遅れてしまったけど、とにかく京大と一緒にゴールしよう。」と考えました。どうやらポスト位置も同じだったらしく、途中で野うさぎに驚かされたものの、10番、11番そしてラスポもほぼ同時チェック、期せずして東大・鹿島田と京大・中村が並走してスタートするという見せ場を作ることになりました。

ゴール後、東北大と３分差の２位と聞き、思わずガッツポーズ！でした。

２走・鹿島田浩二

（レース前は…）「インカレを楽しんじゃおう」をスローガンにして、勝負に執着しないように心掛けていました。

僕自身のレース内容はというと、京都と同時スタートした後、②→③で東北大をとらえました。③で多少ミスったものの→④→⑤そしてビジュアルと、３校はほとんど差がなく通過して行きました。⑥への道走りまでは、後ろに京都がいたのは分かりましたが、⑥を過ぎた後は全く姿を見ず、自分のペースでやれば追いつかれない自信があったので、残りは比較的のびのびとこなしました。

３走・鈴木卓弥

（レース前は…）「すべての過程を楽しもう」と、10月からは月間 250～ 280km走り込み、また生活時間もレース当日に合わせたり、『毘沙門山』でルート研究をしたりして、万全の準備で臨みました。

さて、鹿島田さんがラス前ポストを通過したというコールがあり、いよいよ自分の出番となりました。コーチからは京大と２分30秒差くらい、一緒に帰ってくればいいと言われました。走順が決まってから、自分の役目は鹿島田さんと竹澤さんの間を１秒でもはやくつなぐことにあり、何も他に考えなくていいと心に決めていたので、特別プレッシャーを感じていませんでした。鹿島田さんは「３番に気をつけろ」とタッチしながら声をかけてくれました。今思うと、この一言で一層レースにのめり込めたような気がします。

１番、２番で少しミスをして、もしかしたら京大に抜かれたかもしれないと思いましたが、「まあいいか。」と割と冷静でした。問題の３番をすんなりとれてからは、いつになく良いレースをすることができました。ラス前ポストへ向かう高い尾根上で、「…１位東京大学…」というアナウンスが会場の方で聞こえてきて、はじめてまだ抜かされていないということを確認したのでした。

竹澤さんにタッチをしようとすると、なんとこれから走る彼が「よくやった。ほめてつかわす。」と、いつもの軽い調子で声をかけてくれ、これにはちょっと驚きました。

４走・竹澤聡

当日は、前日の個人戦の疲れが残り、ひざやふくらはぎがやや痛くなり、トレーニング不足を痛感しました。が、１走２走３走と予定通りにこなし、７分もの貯金つきでタッチを受けたときには、足の痛さも忘れていました。レース中は、とにかくつぼらないことと歩かないことを心がけ、守りのＯＬに徹しました。又、読図はていねいに行い、７分の貯金に支えられた余裕のＯＬをしました。「１分差に縮められてもいいからＴＯＰでゴール」と思いつつ走りましたが、まさか本当に20秒差まで縮められているとは、ゴールするまで気がつきませんでした。レース中はつぼらず、他の４走を全く見ず、又特に他大の４走を意識することなく、走ることができました。第３中間を通過してからウイニングランのことを考え、ラス前でみんなの「タケザワ」コールを聞いてから優勝を確信しました。（実はあの「タケザワ」コールは「後ろから東北がきてるから気をつけろ。」の意味だった）ウイニングランの時は涙が出て、何が起こっているのかよく分かりませんでした。

４走でヘロヘロと走ってこんなにいい思いをさせてもらい最高です。前の３人と応援してくれたみんな、ありがとう。

東大は、今年ケガのため出場できなかった山本君をはじめ新人が育ち、厚い選手層を誇ります。来年も優勝を狙います。

プロフィール

１走・岩本隆史
①Ｓ44年12月７日生まれ・22歳・Ａ型
②ＯＬ歴４年・毘沙門山で行われたインカレセレクションＨＥ
③岐阜インカレＨＵ２位
　91東日本大会Ｈ21Ａ２位
④Ｈ21Ａを走れる体力を維持する
⑤駅伝・球技・スキー等スポーツ各種
⑥機械工学

３走・鈴木卓弥
①Ｓ46年１月10日生まれ・21歳・Ｏ型
②ＯＬ歴２年・関東学連新人戦２位
③91京葉大会Ｈ19－20Ａ１位
　91富士宮大会Ｈ19－20Ａ１位
　91朝日大会Ｈ19－20Ａ１位
④インカレシード選手に選ばれるくらいに速くなること
⑤走ること・図書館でのんびりすること
⑥物理工学

４走・竹澤聡
①Ｓ45年12月７日まれ・21歳・Ｂ型
②ＯＬ歴６年・86農工大リレー大会ＨＣ
③86朝日大会Ｈ15－16Ａ１位
　Ｏ－ＣＵＰ91Ｈ19－20Ｅ総合２位
④ＯＬを楽しみつつエリートを走る
⑤木工芸・麻雀
⑥システム基礎科学

1992年度

スキーオリエンテーリング世界選手権

1992年度スキーオリエンテーリング世界選手権大会は，1月末から2月初めにかけて，スイス国境に近いフランスの田舎町・ポンタルリエ周辺で開かれた。

フットと同じくこのスキーOもスプリント＝ショート・ディスタンス＝を加えた3種目，すなわち個人（クラシック），スプリント，リレーが，それぞれ1月29日，31日，2月1日の順で行われた。

1月29日の個人選手権は細かい起伏とルートチョイスに富んだロングレッグを含んだ世界選手権にふさわしい技術的に価値をもったものであった。21か国からの参加があり，男女ともトップオリエンティア達全ての名前があった。スカンジナビアからは卓越した人気選手達がやってきたが，他の国々の選手達も決してメダルへの能力がないわけではなかった。大いに不気味なのはバルティック各国からの選手の動きであったし，彼らは初めてそれぞれの国のカラーのもとで走るのであった。N.R.ブラトベリ（ノルウェー）やA.ビョルクマン（スウェーデン）の前回シェルレフテオ＝スウェーデン＝からのタイトルを守れる保証はなかった。

●金メダルはノルウェーの
ビダル・ベンヤミンセンが獲得

偉大なノルウェーのスキーオリエンティアであるビダル・ベンヤミンセンが過去数度にわたる世界選手権で銀や銅に甘んじていたが，ついに世界選手権金メダルを自らの努力で勝ち得たのである。男子は難度のある12ポスト，29,000メートルに及ぶ長さ，そして細かいアップダウンの繰り返しを重ねて登距離実に650メートルのコースを克服しなければならなかった。ビダルは中間6ポスト地点ではトップと40秒差の3位グループにいたが，後半力強い走りを見せて，94'34"のタイムで逆転優勝を飾ったのである。彼は「実によいレースをした。特に後半では世界チャンピオンのタイトルを確信できた。」と語っている。

女子で新チャンピオンとなったスウェーデンのアニカ・ゼルとともに，2人はスキーオリエンテーリングの最良のPRを行い，このすばらしいスキーオリエンテーリング・スポーツの評判を高めたのである。

●アリヤ・ハヌス――アゲイン！

アリヤ・ハヌス（スウェーデン）がフィンランドのビルビ・ユーティライネンに14秒の差をつけてスプリント・レースを制したとき，彼女にとって3つ目の世界選手権金メダル獲得成ったのである。

1月31日に行われた女子スプリントのコースは，直線距離で6.4キロ，140メートルの登距離，7コントロールであった。地図上の破線と実線の道(*)の割合は61%と39%である。天候状態はコース上にいる全てのオリエンティア達にとってほぼ同等であった。気温は日中に幾分上り第2または第3シードのグループがややその恩恵に浴したかもしれない。

アリヤは相対的に完全なレースをしたが，コントロール3～4の間では彼女のルートがベストであったかどうか疑わしい。しかし，この間でさえ2位のビルビに4秒遅れをとっただけである。

男子スプリントのコースは直線で9.6キロ――理論上，スキーでの距離は12.6キロ――，登距離は200メートルであった。地図の縮尺は1：15000,等高線間隔は5メートルのものを使った（注：本誌2・19ページ「今月の地図」参照）。全部で12コントロール，破線の道58%，実線の道42%の割合で，優勝タイムを約42分と見積もられた。

上位7人がこのタイムを上回った。特に興味あることは3人のメダリストがクラシックレースと同じで順位も全く同様であった。最適のルートチョイスをしたランナーはおそらく109の分岐を通過したであろう。例えば，ビダルは1分あたり3回のルートチョイスをしなければならなかった（21秒ごと，正確にいうとそれ以上）。

●新春の太陽のもとでの
エキサイティング・リレーレース

スキーOの選手権は2月1日に行われた。女子スウェーデン・チームは小柄なアン・シャロット・カールソンが最初のタッチでフィンランドをリードした。しかし2走ではアニカ・ゼルがフィンランドのミルハ・オハーネンに僅差に追いつかれた。最終走者のスタートの時点で，そのアリヤ・ハヌスと好敵手ビルビ・ユーティライネンの差はたった14秒であった。しかしこの時間を知ったアリヤは，このフィンランドのスキーヤーを望みを持たせることなく引き離してしまった。陽が昇って柔らかくなった雪にもかかわらず，アリヤはこの日ベストのタイムを簡単に出してしまい，フィンランドを上回ること8分(!)という強烈な勝利をチームにもたらしたのである。強いスキーヤーを揃えたエストニアとブルガリアを抑えてノルウェーが銅メダル。そして，チェコスロバキア・チームが驚くべき6位を勝ち取ったのである。その1走，マルセーラ・クバトコバ（編集部注：フットでもランキング入りするほどの好選手）が好調で，ロシアの走者を大きく引き離し，そのロシアは挽回しようと努力したが追いつくことができなかった。

●驚くべきロシアの強さ
――男子リレー

1988年と1990年の選手権者であるフンランドのアンシ・ユーティライネンはそれほど印象的な強さを見せなかった。しかしさすがに輝かしい走りで，3走の段階でノルウェーとロシアの2走者を抜いてチームをトップに立たせた。しかしたった6秒という僅差であった。そしてこのリードを4走がひろげてフィンランドの優勝となったのである。2位に4分半ほどの差でロシア，ノルウェーは銅メダルであった。1990年のこのリレーのタイトルをとったスウェーデンは，今回メダルを逸して4位に甘んじた。以下，健闘のイタリア，そしてブルガリア，エストニアと続いたのである。

［IOF発行"ORIENTEERING WORLD"誌 1992 No.1 Aprilより抄訳］

第２回 日本学連 スキーオリエンテーリング大会

●１９９２年1月１２日
●北海道　江別市・札幌市

昨年は，２日間の講習会形式で行いましたが，時期も悪かったせいもあってか，わずか４名の参加者しかありませんでした。しかし，今年は３９名（道外から１０数名）もの参加がありました。テラインの制約上，いずれのコースも地図読みの能力がほとんど問われないものになってしまい，物足りなさを感じた人も多かったかも知れません。そのような訳で，レースの方はクロスカントリースキーの技術が大きくものを言うことが予想され，北海道勢の上位独占かと思われましたが，岩手大学の八重樫君，北信越の木村さん，東北大の菅原さん，下野さんらがＨＡ，ＤＡで健闘し上位に入りました。また，ＨＢクラス優勝の電通大の山口君は，スキーのワクシングの様子からもただ者ではないと思っていましたが，案の定２位に１０分もの大差をつけてしまいました。タイムから考えて，彼に勝てるのは今回の参加者・運営者を含めて上野委員長だけではないでしょうか。

さて，今回は幸い天候に恵まれたため，スキーオリエンテーリングの競技としての面白さとは別に，雪で白く染まった林の中を滑っていく壮快さを満喫できたと思います。あの感覚はやった人にしか判らないものです。歩くスキー愛好者が多い理由の一つであると思います。

最後に，今回も昨年同様，参加者が少ないのではという危惧のため，運営の人数を極力少なくし，北大ＯＬＣの部員の大半を参加者に回したため，不手際が多く参加者の皆さんにご迷惑をおかけしたことを，この場を借りてお詫びいたします。次回以降に関しては検討中ですが，開催可能な限り続けて行きたいと思っています。われわれも，スキーＯＬに関して知らないことが多く，少しでも多くの情報を望んでいます。スキーＯＬについて何かご存知の方はご一報ください。われわれも微力ながらオリンピック種目になる可能性を秘めたこの競技の発展のためのお手伝いができれば幸いと思います。

［文責：日本学連スキーＯＬ委員・深澤　和臣］

第１８回 岡崎東公園ＯＬ大会

●１９９２年2月9日
●愛知県・岡崎市

岡崎市教委，岡崎ＯＬ委，中日新聞社共催の第１８回岡崎東公園ＯＬ大会が開催された。競技センターは例年の東公園内ではなく，５００ｍ南に移動した洞町公民館を借用。コースのマンネリ化防止を図った。ゲレンデの中央部分に最近大きな道路工事が入り，コースの制約も増えてきた。クラスは男子８，女子３，他にトリム３が用意された。H21Aは6km／１３コントロール。ショートとロングのレッグの組合せで，比較的新鮮なコースだった。ショートのレッグでは地形読みが要求され，やや難しい。特記すべきこととして，高校生の参加が多く，H18B，ＤＢは大変盛況だった。高校の数としては限られているものの，こうしてまとまった参加があることは大変嬉しい。おかげで第２受付でかなり並ばされるはめになった。この大会は今もハガキ申込みで当日参加も可という形を取っており，初心者が行きやすい大会とも言える。私も甘えて当日参加組にしてもらった。

大会閑散期とあって，遠来の方も見えた。また元愛知ＯＬＣの塚本哲さんが久し振りに参加されて，いきなりH45Ａで優勝というブランクを感じさせない走りを見せてくれた。

［リポーター：三河ＯＬＣ・小野　盛光］

全国勤労者ふるさと交流会 ふれあい淡路 オリエンテーリング大会

●１９９２年2月１６日
●兵庫県・緑町

日本学連の「いぶき」に謎の大会として紹介してあったので，謎だと思っている人たちに対して，参加者の立場から説明したいと思います。

第１回は1990年２月11日，第２回は1990年11月18日，第３回は1992年２月16日，場所はいずれも淡路島で，洲本市，津名町，緑町と移動してきましたが，第４回は再び洲本市の予定だそうです。舞台が淡路島であるのは，政治的な要因によるものと思われます。バックに労働省がついていて資金がたっぷり出るので，参加費は無料なのに，参加費や入賞（３位以内）の賞品は豪華で（競技以外の）最大の目玉は前夜の交流会のご馳走です。

参加資格は「勤労者に限る」と書かれていますが，専業主婦や年金生活者や大学院生も出ているので，要するに，インカレに参加資格のないおとななら大丈夫のようです。

出場クラスは，Aクラスが第2回より増えて，H20，H30，H40，H50，D20，D30，D45となっています。数字は「その年齢以上」ということで，上限はありません。実際，女子の場合全員が年齢通りにエントリーしたら，D20AよりD30Aの方がハイレベルの優勝争いになってしまいます。それはさておき，この大会の競技的な特徴は，県対抗の団体戦です。各Aクラスの1位の得点を 100点として，2位以下の得点は優勝タイムとの比率で計算し，得点の高い者から4人（前回までは3人）の得点を合計したものが，各県の得点となります。従って，高齢者の方でもその年代のトップであれば，大きな戦力となります。

今回の参加者は，定員 500人のところ約 450人でした。関西・中国地区の主な社会人オリエンティアは，運営者以外はほぼフルエントリーしています。石井龍男さんや木植早生さんのように，遠路はるばるやってくる人も若干名います。そして，最上位クラスである20Aのチャンピオンは，第1回は村越夫妻，第2回の男子は丸山哲史君と，遠来の人たちにさらわれていましたが，今回は男女とも，事実上「西日本の社会人チャンピオン」を決めるレースになりました。もっとも女子の場合，全日本大会の男子のように，1位は走る前からほとんど決まっていましたが。（木植さんがD30Aに出たため，出田さんの競争相手がいなかった。）

ところで，数年前に関東の方で「社会人選手権」というものが3回ほど開かれたようですが，その時の男子のカップが，この大会に受け継がれています。つまり，今回の男子のチャンピオンがもらったカップでは，この淡路の大会の第1，2回のチャンピオンが，第4，5回の社会人選手権者ということになっているのです。もっとも，もらった当人は，「こんなすごい人たちの仲間に自分が加わってもいいんだろうか？」という当惑した顔をしていましたが。

［OLC吉備路・和田美千代］

開会式セレモニー　［提供：福田　良雄氏］

オリエンテーリング地図印刷
社内報　団体・サークルの機関紙　記念誌
ＰＲ誌　学校新聞　句集　歌集　詩集

有限会社 あしび印刷

〒220 横浜市西区西戸部町3－298
神奈川県教育会館前
☎045－231－5970（代）

第１４回
早大ＯＣ大会

●１９９２年2月２３日
●千葉県
成東町・松尾町・山武町

毎年２月の最終の日曜日が，大会の期日と定着している早大大会も今年は１４回目を迎えた。ここ数年，仕事の関係で大会参加も思うようにいかない日々が続いているが，今回は，前日の土曜日は，仕事の関係で夕方から出張。水戸から２０kmほど離れた笠間市へ。宴会が済んで水戸へ帰り１～2軒のはしご酒。上司と一緒では，明日はＯＬ大会があるからと逃げ出すわけにもいかない。最後までお付き合いし，皆をタクシーで送ってから最後に帰る。翌朝の早起きが気になって，酒は飲んでも酔わない。２２時３０分ごろ帰宅。サラリーマンのつらいところ，これではベストの状態で臨める状況にはない。

当日は午前５時３０分起床。睡眠時間は約６時間足らずである。５時５０分，約束しておいた渡辺さんの車で千葉県の成東町まで約２時間余り，東関東自動車道を使って，以前より３０分ぐらい短縮された。千葉県もこのあたりだと水戸から車で比較的楽に行けるので，できるだけ都合をつけて参加するようにしている。

昨年１２月の筑波大の大会以来のＯＬなので，ちょっとＯＬ勘も鈍りがち。コントロールカードは，専用のケースに入れるという新しい試みが行われた。プログラムの説明によると，このケースの持ち方は，指に付ける方法と腹部に安全ピンで付ける方法の二つの方法が説明されていた。更衣室内の周囲の人達は，プログラム①の方法によって，ゴムで指に付ける方法をとっていた。私は試しに指に付けてみたが，具合がいまいちの感じがしたので安全ピンで腹部に付ける方法にした。これは，数年前にＡＰＯＣのニュージーランドの大会で経験していたので不安はなかった。

会場からスタート地点までは，1.6km 徒歩２０分とは短い。ウォームアップには短い距離である。すぐスタート位置に到着，日当りの良い地点とスタート位置のスギ林を往復して身体の冷えを防ぐ。

スタート１分前。位置説明，コントロールカード，地図が前方１０ｍ位の台上にある。腹部につけたコントロールカードケースにコントロールカード，位置説明を入れ，落ちないようにビニールテープで２か所止める。地図を手にすると同時位にピーピーポーンというスタートの合図。すぐ右手の道を一斉にスタートした人達と走る。地図上の道と小道の交点を求めてスピードを落としたが，無い。右手に明瞭に小さい道が分岐しているはずではないか。そして，グリーンのベタがあるはずだが，はっきりしない。左手に植生界があり，この界を走る人もいる。そのまま走ると道は大きく左にカーブして，荒地と水田か湿地らしいのが見える。現在位置不明である。スタートして２００ｍ走ったかどうかの距離のはずである。仕方なくバック，スタートまで戻ることにして，みんなと逆に走るとスタートして来る人達と正面衝突しそうになる。３分あとにスタートした木植さんとすれちがう。後になって地図の上のスタート位置が道と植生界の境につけられており，ポストマークがあったことを思い出す始末である。何となく位置がわかった感じになり①を目指して走る。５分位は完全にロスしたであろう。今日のテラインはアップが少ないので，少しのロスも命とりになることは十分に承知している。しかし，スピードは上がらない。慎重に①をチェックした。スタートで地図を受け取った位置と地図上の△の位置が異なる。地図上の△の位置より，１００ｍ位は南よりの道の脇でスタートしたのではないだろうか。プログラムにも，現場にも地図の受取位置と△の中心を示すポストマークのの位置が違うという説明は見つからなかった。私の持っている地図だけ△を示すポストマークの位置がずれているとも思えない。いまだに疑問である。もっとも，スタートマークの位置もどこにあったのかはっきりしない始末である。

昨年１２月の筑波大大会以来でＯＬの勘が鈍ったのだろうか。不安な気持ちでチェックを続ける。⑩をチェックする前から同じクラスの人と競り合いになり，⑩をチェックしたあと，３人を振り切りにかかり左前方の沢に飛び込むが，すぐ現在位置がわからなくなる。コンターの読みが甘くなっていたのと植生界の位置が読めないでウロウロ。⑩に逆戻りして別の径を使って再度アタック。一つ番号の違うポストが目の前に。これが植生界のポストと思いながらも自分のポストに到着できないで，また，ウロウロ。畑に出てしまう。大きな畑で現在位置がつかめない。畑と森林の界の道を往復２００ｍも走り，やっと自分の位置をはっきりと確認する。畑と森林の間の道を往復，畑の側にも森はあったが，地図には表記されていなかった。畑の側の森が小さかったのか，森の幅が思ったより狭かったのか確認できないまま，はっきり確認できる位置まで走ってしまった。１０分から１５分は確実にロスしてしまった。無気力からか，しばらくＯＬから遠ざかっているためか，仕事が忙しいからかなあ，と思いつつ心は逃げる。１位は61分48秒というのに，私は86分45秒。トップと２５分の差は６４人中２８位と振るわない。完全な負け勝負だった。仕事が忙しく気持ちが集中できていないのだ。まだまだ修養が足りない身であることにがっくり，疲ればかりがどっと出てくる。

［Ｈ５０Ａ　水戸ＯＬＣ・佐藤　征男］

第８回京大ＯＬＣ大会の後援に関するお詫び

第８回京大ＯＬＣ大会
実行委員長・　川前　紀尚
渉外責任者・　浅井　彰規

先日皆様にお配りした要綱に「後援三重県ＯＬ協会」と明記してありましたが，その段階において三重県ＯＬ協会より後援の御承諾を頂いておりませんでした。このことは，当方の全くの手落ちであり，三重県ＯＬ協会および関係者の方々に深くお詫び申し上げます。

ただ，後援を明記した段階においても当方より三重県協会へ連絡が無かった旨御指摘を受けましたが，当方は10月以降３回ほど手紙で連絡をさせて頂いており，理事の方などまで御連絡が行かなかったことは，残念でなりません。

いずれに致しましても，今回の当方のミスは重大なものであり，今後はこのようなことが無いよう十分に心掛ける所存でございますので，何卒宜しく御願い申し上げます。

＝投稿＝

ミスパンチに関して

『ポストは指定されている順序に回ること。指定のポストに到達したらポスト記号を確認し，第１ポストではチェックカードの「１」の欄に，第２ポストでは「２」の欄にパンチしてください。パンチが正しくされたか，その場で必ず確認して下さい。

所定欄にパンチが押されていないとき，パンチの押し違いや，確認できないパンチがあると失格になります。

パンチを押し間違いした場合は，間違えたパンチパターンを爪等で潰し，正しいパンチが判断できるようにパンチ仕直してあるものに限り有効とします。』

以上は，平成３年度東日本ＯＬ大会（青森）のプログラムに記載されていたものですが，他の公認大会もほとんど同じ内容の事が謳ってあります。

ところが，現実には，所定欄にパンチが押されていなくても，正しく回ったと思われれば失格にならない場合もあり，問題となっています。それは，ＯＬがパンチを押してくる競技ではなくて，指定された地点をできるだけ速く回ってくる競技だという事が一因と思われます。しかし，その証明はチェックカードのパンチでしかできません。ほとんどのオリエンティアは急ぎながらも間違えないよう注意してパンチしています。注意を怠ったものを救済する必要はないと思います。

また，ある同一大会で，Ａはパンチ欄を間違えたことに気付き，戻ってパンチ仕直して競技を続けたが，Ｂは同じミスをしても戻らず，ゴールに申告してＯＫとなった，という話を聞いたことがある。Ａの行為は規定に従ったまでで当然のことだが，Ｂよりかなり遅れたことになる。このような不公平もあってはならないと思う。

少なくとも公認大会では，上記の規定を厳守してほしいと思います。もう少し細かく述べると次のようになる。

①所定欄に空白がない。
②所定欄のパンチパターンが合っていること。また，判読可能のこと。
③ミスパンチした場合，その処置が適切で，だれでも判断できること。

以上であるが，①②は周知でも③は人により判断が異なることがある。例えば，既にパンチしてあるところに重ねてした場合…規定によると，戻ってダブルパンチの部分を爪等で潰して，更に３度目のパンチをしなくてはならないと考えられる。しかし人によっては「そこまでは正常に来たのだから戻る必要はない。ゴールまたは本部で説明して認めてもらおう。」と思うかもしれない。この様に規定があっても，同一ミスパンチからいろいろな考えが出てきます。起こり得るあらゆるミスパンチをあげ，具体的にそれをどのように処置しなければならないか，統一すべきだと思います。

そこで，ミスパンチした場合の処置方法を次のように提案します。

ミスパンチの処置方法　（案）

●パンチ欄を間違えた場合：
正しい欄にパンチする。（次の地点に行っていても戻って来て）。

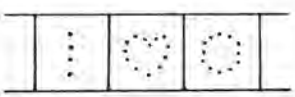
●ミスパンチした欄に正しいパンチを押す場合：
爪等で潰し，新しいパンチを強く押す。またはその欄に２回以上パンチ（ミスしたことを表す）し，リザーブ欄に押す。

●既に正しくパンチしてあるところに重ねてパンチした（例えば，コントロール=ポスト= ４に来て３欄に重ねてパンチした）場合：
まず正しい欄にパンチする。更にリザーブ欄にも押す。ただし，そのとき元（３欄）のパンチパターンが判読可能の事。判読困難の場合はそのコントロール（３）に戻り，リザーブ欄に押す。

●パンチが欄からはみ出した場合：
次の場合はそのままでＯＫとする。パンチパターンの中心が所定の欄内にあり，他のパターンとの重なりが１／４以下のこと。これに該当しない場合は上記のような処置をとる。

現在使用されているコントロールカードにはリザーブ欄のないものもあるが，暫定的に最後の３欄をそれに当てればいいのではないかと思います。

児玉　拓（H45A）



紙上

公開討論

●ルール：自由に意見を書いて，
　最後はイニシャルを一文字いれる

最近右のような記事に出会った。読んでいるうちに疑問が出てきた。

中央のエライ人や我々が思ってもいないのに，地方のしかも個人の考えだけで，さも立派そうに言ってよいのだろうか――。

疑問が広がるばかりである。

討論の趣旨

ＯＬ普及のためには，社会的に知名度を高める必要あり―― 云々　とある。

それについて，まず，社会的に知名度を高めなければならないほどのＯＬ活動なのか？　中央の組織が「あるかないかわからないような状態である」のに――。

それは平成３年５月のＯ－ｃｕｐ９１の２日目を公認大会を取り消すこともしない中央の組織だからである。「２日目を公認大会としたのは何故だ。運営，計時，などなど公認大会とは恥ずかしい」

このような中央を差し置いて地方が勝手に動くことは，将来に向かってＯＬ界の首を絞めることにならないか――。

――知名度を高めたいと思っている人の狭量な自己陶酔と自己満足だけである，と思う。もし，知名度を高めたい，ということで人を疎外することがあれば―― それこそＯＬ界の将来に悪影響を及ぼすものである。

歴史をみても洋の東西を問わず，小心者が権力を握ると，自己陶酔の度合いを深めるため多くの人々を疎外することである。今回，それに繋がるように思われてならない。

それよりも，四国や九州で公認大会が開けるよう支援すべきである，と思う。

Ｔ

体協カロ豊型加速
京都府OLA&岸和田OLA も

【　京都府は，既に申請！　】

京都OLC『鉾』（この編集長・辻村充子さんは，島根出雲市のご出身）。P.11　近畿OL連絡会で，京都府OLA・八田氏の報告「OL普及のためには，社会的に知名度を高める必要がありその意味でも体協加盟は有効である…　京都府OL協会も申請中である。

【　岸和田も，総会議題に　】

岸和田OL協会『KOLA２月号』P.12　４月開催の年次総会で，体協加盟の審議を予告。'94冬季五輪・平成８年の広島国体などで公開競技として取り上げられるとか，また今年の山形国体・来年の東四国国体でもOLが…　ｽﾎﾟｰﾂとして広がりを見せるOLですが，そのためにも体協加盟の動が必要かと思います」。

言いたい放題
じゃぁ
あ～りませんか

①ＰＣについて全国紙の新聞社で，それを紹介する記事を掲載してもらえないだろうか。全国紙でしてもらえるとよいのだが。月に一度，特集してもらってもよい。いつでも，だれでも利用できるのがＰＣコース。９月より，月１回の土曜日が学校休みとなる。ファミリーで地域で自由に使って欲しいＰＣです。

②ＰＣのうち，コースが初心者向き（いわゆるポストが宝探しの状態でないもの）で，整備がされているコースのリストを作成したらどうでしょう。

③ＰＣの地図取扱い所で，コンパスの貸出しをするようにしたらどうだろうか。シルバーのタイプ４ではなくて，タイプ８あたりのひと回り小さいものを，１個２千円の保証金を取って貸し出すのです。初めて利用したくても，コンパスを持っていない人もいますから。コンパスが欲しい人には，そのまま販売してもよいでしょう。

④石川県だったと思いますけど，県内のコースをいくつか回れば，１００キロコンペ以外に県が記念品を出す制度。とても良いと思います。

⑤設置者が管理していないコースについて，都道府県協会がマスターの交換やコース整備（ポスト塗装などの簡単な整備）を受託する制度を実施してみたらどうでしょう。

⑥ＰＣを活用する，ミニコンペを全国一斉に実施したらどうでしょう。企業等のスポンサーを何社かつけて，「全国一斉オリエンテーリング大会」と銘打つのです。５月の第３日曜日に，日本レクリエーション協会では，「全国一斉ウォークラリー大会」をしています。そのアイディアをもらうのです。例えば１１月の第３日曜あたりがよいと思いますけど。初年度は各県１か所でもよいではないですか。

⑦ＰＣ１００キロコンペの申請。現在は１コースごとに申請する方法しかありませんが，１００キロコンペについて多く申請される方は，何件かを取りまとめて申請するようにしてはどうでしょう。２００円の収入に対し，郵便局の振替手数料は６０円。残りの１４０円で認定書やバッヂなどの総てをまかなわなければなりませんから，ほぼ赤字です。せめて，申込みをまとめることで，認定書の郵送がハガキではなく封書でできるように協力してあげてください。

１００キロコンペの申請が多い公認大会では，大会本部でその受付を行なってはどうでしょう。申請書と２００円を預かり，大会本部からまとめてＪＯＡに送付してあげるのです。

⑧ＰＣベストコース・コンテストをしませんか。富田さんや田中さんなど，多くのコースを回っておられる方に検討してもらい，全国ベスト２０を選定してもらうのです。その選定されたコースを全国紙に掲載してもらうのです。宣伝になります。

伊藤　好信

VWC92 決勝コースセッター

Christine Marshall
Mike Morffew

本誌3月号・Veterans World Cup(VWC)92 の報告で読者の皆さんに紹介しましたChristine と Mike の両氏から手紙が届きました。以下の記事はタスマニアツアー報告において，VWC92のコースセッターから見たOLのコメントとして収録を予定したものです。本誌3月号5ページ 図2，図3では等高線間隔を2mとして紹介してありますが，2.5mの誤りです。お詫びして訂正します。

編集委員・船橋　昭一

☆事例1

<VWC　Q1　M35A1のレッグ>
＝本誌3月号5ページ 図2参照＝

直進のレッグである。等高線間隔が2.5mであることにより，（地図の上からは）高い丘があるとだまされやすい。レッグ後半の丘はそれ程高くはなく，丘を迂回する必要もない。コントロール②ですばやくコンパスをセットする。レッグの始めの方では進行の妨げになるものはないから，直進すれば丘が現われる。丘の勾配は直進をする左側の方がゆるやかである。丘のピークを越えたら，進行方向左手の沢または右手の円形状の岩を確認すればよい。

☆事例2

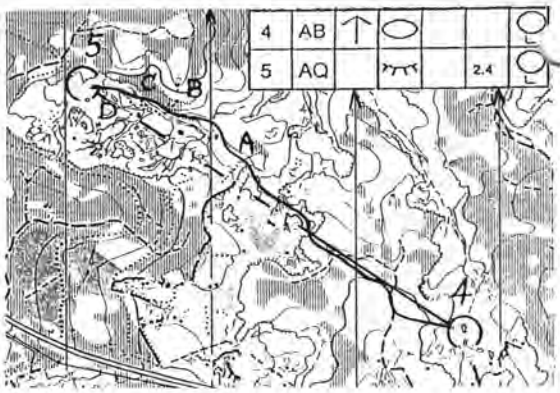
<VWC　Q2　M50A1のレッグ>
＝本誌3月号5ページ 図3参照＝

おもしろいレッグである。地形が複雑で岩も多いことから，注意深い地図読みが必要と思う。この場合はレッグを細分するとよい。コントロール⑥から沢を登りつめて，稜線（尾根）に出る。レッグの半ばに近い部分にあるコブに注意する。（⑦の北東にある）大きな沢に向けて，岩石帯の上を歩測とコンパス走で進む。この沢からコンパスを再びセットしてコントロール⑦に向けて直進すればよい。このとき，⑦へ導く岩とコンターを読む。特に，コントロールのすぐ北には（同じ位置に）はだか岩とコブがあることに注意する。なお，このタイプのテラインでは（得られる情報を）単純化して意味のある特徴物――通常はコンターとか大きな岩――をピックアップするとよい。

☆事例3

<VWC　M40A
(B-Final)　のレッグ>
＝本誌3月号9ページ「VWC決勝のOL（1）」山下　実氏のレッグ解説参照＝

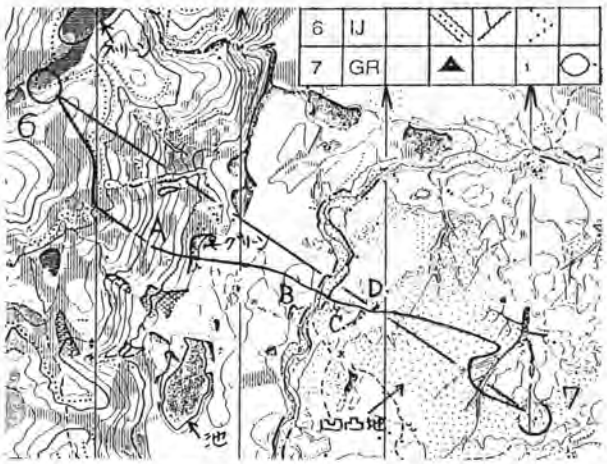
コースセッターの考えも走者（山下氏）のとったルートと同じである。



☆事例4

<VWC　M40A
(B-Final)　のレッグ>
＝本誌3月号9ページ「VWC決勝のOL（2）」山下　実氏のレッグ解説参照＝

このレッグはいくつかの小レッグが考えられる。まず，できる限り早くしかもできる限り直進をして丘を下ることである。この場合，侵食による亀裂を避け（南北に流れる）川を渡ったら，コントロール⑦に近づき易い（レッグの南にある）小径を使うかまたは，大きな池の南端にある丘に向かってコンパス走をすればよい。



(＊) ——— 広く圧雪してある走路　－－－－ スノーモビル等でつけた走路　…… 低速走路

情報あれこれ

■■【中国・四国・九州】ブロック 第1回定例会報告

財間　定義

開催日：1992年3月22日
場　所：第18回全日本オリエンテーリング大会会場
出席者：島根OC＝財間　定義，　OLC吉備路＝中野　浩，　広島OLC＝村上　旦，　福山OLC＝沢畠　良夫，　広島大OLC＝長沼　光紀，尾川　正洋，　愛媛県OL協＝宮内　祐，伊藤　好信，　愛媛OLC＝徳野　利幸，　福岡県OL協＝小坪　彰，　北九州OLC＝吉田　智昭　オリエンティア＝佐藤　博昭，今留　康雄，井上　直子

共通理解：（今後も意見交換に努め，メリットが享受できるように）

1．[基本コンセプト] 近畿の場合と同様“任意のフォーラム”
2．[構成の対象]　学連の場合と同様“中国・四国・九州”
　オリエンテーリングの県組織・クラブの代表者（有志個人も可）。
3．[定例会]　初春の全日本・初秋の吉備路大会等に集い得る有志が，ゴール後短時間の‘例会’を持ち，向こう1年間の大会などの開催情報・意見を交換し合う（会則や義務は不要）。
4．[便宜]　会議の報告書・次回の案内状は，『O-JAPAN』誌に依頼する。
　次回終了までの連絡幹事団を次の四氏に委嘱！
　中国＝財間定義，四国＝宮内　祐，九州＝吉田智昭，学連＝村田武俊

■“AMIGASA”テライン「入林許可願」提出方法の変更について

東京オリエンテーリングクラブ

昨年のO－CUP ‘91の2日目に使用いたしました“AMIGASA”は，昨夏の合宿にも数多くのクラブの方々にご利用いただきました。

今夏についてもすでにお問い合わせが来ておりますが，諏訪営林署へ提出する国有林への入林許可願の提出方法が昨年と変わりましたのでお知らせします。

・許可願は東京OLクラブが一括して提出する。
・利用希望者は「入林者一覧」（別表参照）を東京OLクラブ事務局に提出する。（2通　コピー可）
・「入林許可証」は諏訪営林署から個々の団体へ送付される。

6月上旬に一括提出をいたします。夏の合宿予定のある方はお早目にご連絡ください。

［問合せ・連絡先］　東京オリエンテーリングクラブ
〒177 東京都練馬区関町北3－38－3　斎藤方
☎03－3929－1715

（別表）

入林者一覧　　期間　自　　月　　日
　　至　　月　　日

団体名　　責任者氏名
　　住所・電話

氏　名	〒	住　所

編集部より

◆いつもの年と同じく，3～4月は青色申告や購読更新の整理に追われます。税務は2月中に済ませてしまいたいところですが，クラブ大会等があると思うにまかせません。平成3年1～12月の損益計算書の数字をお知らせしておきます。

収入金額（雑収入を含む）	¥3,707,746
経費	
租税公課	110,246
荷造運賃	2,890
通信費	1,031,440
接待交際費	17,900
消耗品費	403,759
備品	27,135
印刷代	3,005,690
雑費	112,028
（経費合計）	¥4,711,088
差引欠損	△¥1,003,342

◆この赤字は実はJOLCから経理を引き継いだ時からのもので，これでもこの5年で約半分近くまで減らしてきたものです。今月から印刷代が割高となる「再生紙」の使用を止めることにしました。少しでも早く自転車操業を解消するため背に腹は代えられませんから。◆拙稿「こどものためのオリエンテーリング」またまた休ませていただきました。◆17ページ「公開討論」のTさんとは別人という意味で私のほうは……　一流人一

O－JAPAN　92／4
No.105　1992. 4. 10発行

発行／O－JAPAN
発行人／田口　昭子
〒233 横浜市港南区日野南7-9-5
TEL. 045-891-7004
FAX. 045-891-2500
郵便振替口座／横浜7－　46870
（加入者名）O－JAPAN 編集部
購読料　年間4月～3月 ¥3,000
（高校生以下）　¥1,800
1部あたり頒布価格　¥250

編集責任者／田口　肇
Chief Editor: Hajime Taguchi
Editorial Address:
7-9-5, Hino-minami, Kohnan-ku
Yokohama, 233 Japan